



**古今東西の
映画をこよなく愛する
映画ジャーナリストによる
受講者参加型講座**

監督、スタッフから俳優まで、日本映画を知り尽くした植草信和さんと、アメリカ、ヨーロッパなど外国映画が大好きな二井康雄さん。この両氏による、思わずうなずいてしまう映画を楽しむヒント満載の講座です。毎回話題の新作・オススメ映画紹介も。映画ファン、映画通の方、みなさまぜひどうぞ！

植草信和

1949年、千葉県生まれ。1970年、キネマ旬報社編集部に入社。1991年、キネマ旬報編集長に就任。1995年、取締役編集主幹に就任。「スタジオ・ジブリ」「中華電影データブック」など、650冊の編集に携わる。02年退社。角川文化振興基金アジア映画資料室を経て、2005年映画製作・配給会社「株式会社太秦」を設立。「台湾アイデンティティ」「鬼に訊け・宮大工西岡常一の遺言」をプロデュースする。「健さん」に企画協力として参加する。

二井康雄

1946年、大阪生まれ。1969年、暮しの手帖社入社。主に商品テスト、環境問題などに従事。藤城清治、沢木耕太郎、立川談四楼、阿久悠などの連載を担当、その単行本を編集。2002年より本誌副編集長。2004年より3年ほど、本誌のタイトルや見出しなどの書き文字を担当。2009年、定年退職後、「シネマの手帖」（暮しの手帖社）の編著。2016年、「ぼくの花森安治」（CCCメディアハウス）を刊行。現在は映画ジャーナリストとして、映画レビューを執筆。

戦後の我が国におけるアメリカ映画の普及には目を見張るものがある。実はこれはGHQ(連合軍総司令部)がしかけていた！？日本人に「映画を通して民主主義を普及」させ、同時に「アメリカの基幹産業である映画」を日本でひろめる。まことに合理的な目標をGHQは持っていたのだ。

一方敗戦後の日本映画の製作と興行は、俗に《チャンバラ禁止令》と呼ばれるGHQの厳しい指導体制下で始まった。詳しい話は講座にゆずるが、戦前戦中の日本映画は半数以上が時代劇だったため、この規制は致命的だった。敗戦のどん底にあった中、さらにGHQの規制下、戦後日本映画はどのように生まれ、蘇生し、現在の日本映画となったのであろうか。また現代の我々の生活とどのように繋がっているのだろうか。

「その原点を探り、今を照らし出す」。そんなチョット深い視点で戦後の日本映画の70年を考えるのも悪くない。現代の日本が抱える事象のいくつかを、その解決の糸口が発見出来るかもしれない。

日本人は何を思考し何を目指してきたのか。戦後日本映画の歴史を検証しながら日本人と日本の文化、日本映画を考え、未来を一緒に見つめてみよう。とはいえそこは映画の話。おもしろく、エンターテイメント風を楽しみながら。

開講日時：毎月第2水曜日 19:00~20:30 月1回90分 ★事前にお申込みください
 受講料：●料金 前半3ヶ月(10月~12月)¥5,400 ●ビクター料金 1回¥2,500
 ●入会金(初回のみ) ¥3,000 ※シネリんの方の割引あり。

【講座日程】

- ・10月12日 「戦後日本映画は『リンゴの唄』からはじまった」(1945年～1954年)
映画『そよかぜ』『七人の侍』『青い山脈』『東京物語』
- ・11月9日 「高度成長突入・日本映画黄金時代」(1955年～1964年)
- ・12月14日 「ビートルズ・月面着陸・寅さん」(1965年～1974年)
- ・1月11日 「コンピュータ登場・メジャー衰退・ATGと角川の台頭」(1975年～1984年)
- ・2月8日 「ジブリと北野たけし・ジャンボ墜落・平成へ」(1985年～1994年)
- ・3月8日 「地下鉄サリン事件と阪神淡路大震災・映画はレンタルビデオで」(1995年～2000年)

申込・会場：MuCuL ミュウカル

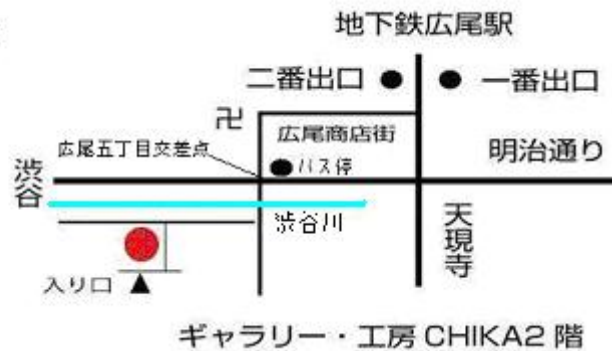
150-0013 東京都渋谷区恵比寿 2-21-3

●Tel.03-3446-2618 ●MAIL：e-mucul@e-mucul.com ●http://www.e-mucul.com

東京都渋谷区東比寿2-21-3
TEL 03-3446-2618

地下鉄日比谷線 広尾駅
二番出口徒歩6分

渋谷駅より都バス06系統
新橋行・赤羽行
広尾五丁目下車



※広尾五丁目交差点を渡りすぐ川を越え、最初の細い道を右折、約30m直進した左角。入口は建物裏側。MuCuLの看板あり。

●企画：《五感の学校@広尾》スクール ●主催：MuCuL ●主宰：佐藤慶子